

2015年2月15日 礼拝メッセージ

聖書：ルカの福音書 21 章 29～38 節

説教：わたしのことは滅びない

1 これらのことが起こるのを見たら

まだ2月の半ばなのに夏の話をするのはどうかとは思いますが、札幌近郊では、5月下旬頃になるとエゾハルゼミがまるで申し合わせたように一斉に鳴き始めます。私はあの蝉の声を聞くと、札幌にも初夏がやってきたと実感します。

イエスは30、31節でこう語っています。「木の芽が出ると、それを見て夏の近いことがわかります。そのように、これらのことが起こるのを見たら、神の国は近いと知りなさい。」

神の国がいつ来るのか、それは誰にもわかりません。けれども何の前触れもなく突然来るのではなく、木の芽が出たら夏は近いとわかるように、神の国が来る前にこれらのことが起こるのだと教えました。

2 二つの疑問

1) 「これらのこと」とは？

では、「これらのこと」とは何か。その具体的なことは、21章8節以降に詳しく書かれています。戦争や暴動が起きる。大地震や疫病、迫害があり、最後は何かとてつもなく大きな異常現象が起きるようです。それが「これらのこと」との指している内容と考えると間違いありません。世界では、大きな戦争が何度も繰り返されてきました。今も紛争やテロが続いています。四年前に大きな地震と津波がありました。とは言え、幸いにしてまだ全人類が滅びるような深刻な状態にはなった訳ではありません。ということは、神

の国はまだまだ遠い先のことということになります。少なくとも、今日明日ではなさそう。だったら、せいぜいこの世を楽しもう、という話になります。

しかしイエスはこうも言っています。34節。「あなたがたの心が、放蕩や深酒やこの世の煩いのために沈み込んでいるところに、その日が異のように、突然あなたがたに臨むことのないように、よく気をつけたいなさい。」

先ほどは、しるしが見えたら神の国は近いとわかる、と言っていたのに、今度は、ある日突然来るかもしれないから気をつけなさい。なんだか言っている事が正反対のように聞こえます。いったいどういうことなのでしょう。

2) 神殿とは？

そもそも、今日の箇所はどんなことから始まった話であったのか。発端は、6、7節にさかのぼります。人々は神殿がすばらしい石や奉納物で飾ってあるのを見て、「すごい」と歓声を上げていました。それに対しイエスは、「あなたがたの見ている神殿は完全にくずされる日がやってきます」と言います。これを聞き急に不安になった人々は、「そんなひどいことはいつ起こるのか、何かしるしというものが起きるのか、教えてください」と尋ね、イエスがそれに答えた。そんな流れです。ここは、神殿がくずされるという話と密接に関係がありそうです。

では実際に神殿はいつくずされたのか。西

暦七十年にローマ軍が神殿を破壊してしまいました。今エルサレムに行ってみることが出来るのはその残骸です。イエスの預言どおりです。そうするとどうなるか。ここに書かれていることは、ほとんどすべて起きてしまったこととなります。この箇所は、私たちには関係がないことになる。でも現実はどうか。戦争やテロが起き、天の万象が揺り動かされると聞いても不思議ではないような世界の状態になって来ています。やっぱりイエスは、これから先のことを言っているようにも感じます。どう考えていいのか混乱します。

ここから種明かしをしていきます。混乱してしまう理由が二つあります。その一つ目。建物の神殿だけを見ているから話が混乱してしまいます。二つ目。「これらのことが起こるのを見たら」とあるけれど、これらのことはいつ起こるのか。なんのことなのか。イエスの語っている視点と私たちの常識と食い違っているので混乱してしまうのです。

## 2 神殿は、イエスのからだを指す

では最初に神殿の事から見ていきます。神殿というと建物のことだけと考えてしまいました。でも、ヨハネの福音書2章19節でイエスはこう言っています。「この神殿をこわしてみなさい。わたしは、三日でそれを建てよう。」大きな神殿を三日で建てることは誰もできませんから、このことばをまともにとったら理解不能です。事実、イエスのことばを聞いた人たちは驚きあきれて、そんなことができるはずないと言った訳です。そこでヨハネは、「イエスのご自分のからだのことを言われたのである」と説明しました。イエスが神殿と言うとき、建物のことだけを言うのではなく、イエスのからだそのものを指

すことがこれでわかるでしょう。イエスのからだは十字架につるされます。神殿とも言われるイエスのからだはそこで完全にくずされたのです。

それはわかるとしても、なお疑問が残ります。ここに書かれているような戦争や迫害、疫病、ききんはどうなったのでしょうか。起こったのでしょうか。少しは起きたかもしれません。でも、人々が恐ろしさのあまり気を失うような大変な事態が起きたか。そんなことは聖書に書かれていません。まだ何かもやもやとして混乱したままです。

## 3 「これらのこと」は、十字架を指す

そこで、先ほど取り上げた二つ目のポイント、「これらのこと」とはいったい何を指すのか、いつ起こることなのか。それを考えることとなります。

「これらのこと」と言われる戦争やテロ、迫害はすでに起きたことなのか。それとも未来に起こることなのだろうか。私たちはそういう目で考えます。時計の針が進むようなイメージで時間というものをとらえているので、そう考えるのがあたりまえです。

しかし、どうもイエスが語ることばは私たちのそんな常識があてはまらないようです。時間が後であるとか先であるとか、そういう順序をいったん捨ててみましょう。そうすることで初めてイエスが何を言いたかったのか、見えてくるものがあります。

結論から言えば、「これらのこと」とは、実は十字架のことをも指しています。そのような前提で30、31節を言い直せばこうなります。「木の芽が出ると、それを見て夏が近いことがわかります。そのように、あなたがたは、人の子が十字架につるされるのを見た

ら、神の国は近いと知りなさい。」

でも、十字架のときに、戦争や暴動、天の万象が揺り動かされるようなことが起きたのか。別の箇所にも、天地が暗くなったとか、地震が起きたとか、そのようなことは確かに書かれてはいます。でも、人々が気を失うようなことが起きたとは書かれていません。大変なことは何も起きていません。肉の目で見るならそうです。

しかし、霊の目で見るならどうでしょうか。そこで何が起きたのですか。神の子を十字架につるしたのは誰ですか。なぜ神の子を殺すことになったのですか。律法学者たちの心の中にあるねたみがそうさせました。人々は、イエスに期待を寄せているとおおいにはやし立てておきながら、いざ逮捕され、裁判となった途端見捨てました。弟子たちも逃げていきました。そうやって人々はこの方を殺しました。

なぜ人は戦争をするのか。なぜ人と人とが争うのか。いろいろな説明があります。けれども、全部元をたどっていけば十字架にたどりつくのではないですか。何しろねたみによって神の子を平気で殺すくらいですから、人を殺すことはもっと簡単です。自分が一番になりたいという罪の思いがありますから、それを邪魔する者がいると憎み、殺そうとします。赦すことなど絶対にできないとい怒りで一杯になります。それがすべテ戦争や暴動、テロを引き起こしていきます。

ということは、主が「これらのことが起こり始めたら」と言うとき、それはもちろんこの世が減ぶときでもありますが、同時に十字架のことも言っている事にはならないですか。未来のことも今現在のことも含めて、十字架のところには私たちが引き起こして

戦争や暴動テロ迫害、すべての悲惨なできごとが全部凝縮されている、ということです。

#### 4 十字架に凝縮されている人の罪

イエスは、このあと間もなく十字架につるされていきます。そんなとき、どのように過ごされていたのかが37節にあります。「さてイエスは、昼は宮で教え、夜はいつも外に出てオリブという山で過ごされた。」

昼は宮で教えるのはよいとして、どうして夜になるとわざわざエルサレムの町から出ていくのでしょうか。町にはイエスを殺そうとする人々がいたので、危険を避けるために夜になると町から出て行って身を隠したのだという説明を以前聞いたことがあります。しかし、どうも事情は反対のようです。

律法学者たちはイエスを捕まえようと必死です。ところが民衆はイエスに心を寄せ、イエスはいまや希望の星です。それがますますエスカレートしているときです。そんなときに、人々が見ている前でイエスを捕まえでもしたらどうなるか。「なにをするのか」と叫んで暴動が起きるのは目に見えています。なので民衆がイエスのそばにいる限り、手を出すことができない。

皆さんがイエスの立場になったとしましょう。いのちを狙われています。身を守るための最善の方法はなんだと思いますか。どこかに隠れることでしょうか。いいえ、反対です。いつも人々に囲まれているようにする。それが最も安全な方法です。

ところがイエスはどうしたか。夜になると町を離れました。町の外には民衆はいません。つまり律法学者たちから最も狙われやすいところに、わざわざ身を置いたこととなります。それも夜という人目につかない時間です。

事実、イエスはこの後、夜の時間にオリーブ山で逮捕されます。わざわざイエスをご自分がつかまるようにと、ご自分のからだを危険なところに置いていたのです。

そこまでしてイエスは、人の心の中にある罪の思いをご自分のところへ引き寄せようとしておられました。すでに死んだ人たちも、今生きている人たちも、そしてこれから産まれてくる人たちも、時間に関係なくすべての人々の罪が十字架に凝縮されるように、あらゆる手を尽くしていたのです。

ここに書かれていることを読んで、恐ろしさばかりが頭に焼き付いてしまうかもしれません。でも、主が先立って十字架において味わってくださったことを思い起こします。十字架で主のみからだはくずされましたが、主のことばは滅びません。主が約束されたのですから、私たちは霊の目を開き、近づいてきている神の国を仰ぎ見たいと願います。